

功名と恩恵

世に処しては必ずしも功を邀(もと)めざれ、過(あやま)ちなきは便(すなわ)ち是れ功なり。人と与(とも)にしては徳に感ずることを求めざれ、怨みなきは便ち是れ徳なり。

洪 自誠

冒頭の一節は、以前にもご紹介した「菜根譚」の前集第二八に掲載されているものです。現代語訳は、「世渡りでは、必ずしも功名を立てなくともよい。大過なく過ごせれば、それがすなわち功名だ。また、人と交わるときは、わが恩恵に感謝することを求めてはならない。怨まれなかったなら、それがすなわち恩恵だ。」(岩波文庫〈今井宇三郎訳注〉)となっています。

この箴言の前段は、功名を求めて逸る心を戒め、物事を着実にを行うことを諭したものと思われまふ。私事ですが、昭和 30 年代半ばに生を受けた者としては、前半生を昭和の「競争社会」の真只中を生きてきたわけで、功名とは、正に「功成り名遂げる」ことだと考えていましたし、多かれ少なかれ意識のどこかにそれを求めるような気持ちも刷り込まれていたように思います。しかし、現在では、功名とは結局日々の積み重ねの結果なのではないかと思ひ至り、この箴言の深意が少し理解できた気がしています。

ところで、この箴言の本来の意味とは離れるかもしれませんが、昔から「駕籠に乗る人担ぐ人そのまた草鞋を作る人」という諺があるように、この社会は、実に多くの人々の存在や役割、そうした人々のかかわりで成り立っています。コロナ禍で、この社会を支えるエッセンシャルワーカーの重要性が改めて注目されましたが、世間の注目を集めるようなことばかりではなく、社会の様々な場面で、エッセンシャルワーカーのように、地道にそれぞれの職責等を果たすことも立派な功名であると考えられます。翻って、いわゆる功成り名遂げた人も、多くの場合、家族や友人、上司、同僚など多くの人々の支えがあってこそ成り立つものであり、そういう意味では、功名とは、本来そのことに関わった人々が、程度の差はあれ、分かち合うべきものなのではないかと思ひます。

この箴言の後段は、恩恵に関して、他者に見返りなどを求めることを戒めるものと思われまふ。これもその箴言の意味とは少し離れるかもしれませんが、組織の中にいると、「自分が彼(女)を引き上げてやった」とか、「自分が彼(女)を育ててあげた」という発言をときに耳にすることがあります。職場の上位者や先輩として、人材の育成に努めることは大変意義のあることですが、たとえ成長を喜ぶ気持ちからの発言であったとしても、当人が、先のような発言をすることは、基本的に慎むべきものと考えまふ。時と場合によりますが、相手方からすれば、それを耳にするたびに、感謝の念も薄れますし、度が過ぎれば、却って「怨み」の感情さえ持たれるおそれもあると思われまふ。

最後に、当財団の事業との関連で少しお話したいと思ひます。当財団の事業は、神奈川県企業庁からの受託事業がその太宗を占めています。県企業庁の事業を補完する水道料金徴収等事業、水道・ダム・発電関連施設の巡回点検及び水道管布設工事現場管理等事業などは、県民生活を支えるインフラ関連事業にかかわるものであることから、正に、事故等を起こすことなく、一つひとつの仕事を着実に遂行することが「功名」であり、日々の仕事を平穩に行えることが「恩恵」であると考えられます。

令和6(2024)年3月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡明